

資料紹介

小城鍋島文庫蔵『和学知辺草』翻刻稿（下）

小城鍋島文庫研究会

中尾友香梨・白石良夫・三ツ松誠・日高愛子・大久保順子・沼尻利通・中尾健一郎
村上義明・二宮愛理・進藤康子・亀井森・土屋育子・田中圭子・中山成一・脇山真衣

『和学知辺草』は、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫所蔵の写本（三卷三冊）である。他に伝本を見ない。小城鍋島文庫研究会では、平成三十年度より本資料の輪読をすすめ、本誌第十四号と第十五号にそれぞれ上巻と中巻の翻刻稿を掲載した。本号には下巻を掲載する。翻刻要領は前二号と同じである。

本研究はJSPS科研費JP18K00282の助成を受けたものである。

翻刻

（表紙）和学知辺草 下

和学知辺草 卷之下

一 或問、齋元の神道と号する一流有之由。其説、如何。

答曰、此神道は、聖徳太子を祖としたる一流也。惣じて神仏習合の事は、太子より始る。其故は、太子の語曰、「吾国如^ニ種子^一、天然^ハ如花実^一、

震旦^ハ如^ニ枝葉^一。花落^テ帰^ル根^ニ故^一、仏法東漸^{スト}」云云。言心は、神道は種也^{タネ}。仏教は花実也。漢土の文字の教は枝葉也。然ば、仏法は神道より出ると云て、儒仏の二教を兼て用ひ給ひし也。

齋元の神道と称して一流を建立したる事は、近代、黒滝の潮音と云禪僧の『大成経』と云書を偽作せしより始る也。其『大成経』は、聖徳太子の『旧事本紀』を増補し拵へたる書也。正部三十八卷の内、十六卷は隠山大神の記す処と云り。残る二十二卷、及び雑部三十四卷は、太子の撰述と偽れり。全部七十二卷也。陰山大神記す処の土簡は、土笥^{ハニクダ}に入れ、河内国平岡^{ヒラ}の社に納り居たりと云。或は、全書を天王寺、三輪^{ミワ}、磯辺の三処に納め有し共云り。

今按るに、十六卷は古来より伝る書にても有べけれど、脱簡^{ダツクワ}等多かりしを、夥しく増補して、七十余卷とは成たる物成べし。

其頃、一色長左衛門と云牟人の者有。是は、一色式部少輔藤長の庶子^{シヤウジ}に、七郎正重と云て、洛陽の市中に隠れ有しが、其子堀川主馬定正と云者、諸卿へも相交りて、少々和歌の道なども聞けるが、後に越前少将光通朝臣に仕へ、三百石を領す。此時、一色長左衛門と改む。生得^{セウドク}信なく、

金銀を貪り、行跡甚だ悪かりしが、遂に禄を失ひ、浪牢の身と成てより、潮音和尚と心を合せ、『大成経』を偽撰し、伊勢の社人など、太神宮の御請取の所を争ひしにより、天聴に達し、勅有て深く咎められ、公儀よりも其書の板行を止めて、世に流布する事を禁止し給ふ。

其書、聖徳太子の作に非る証多し。太子の時分は、異国は隋の代に当れり。然るに、宋朝にて陳図南より伝へたる河図洛書の図を取て、偷道の、独道など、云。又、宋朝已後の俗語の字も入たり。「活潑々地」などの俗話、是也。且亦、支干晦朔を知せる。皆、吾朝の正史に不合事のみ也。皆、『大成経雑文』に詳なれば、爰に略す。

如斯浅はかなる偽作共を以、斎元の神道など、名を付て、人を欺んとせしかど、此書絶板の後は此流絶たりと也。

一 或問、今世に云唯一宗源の神道は、上代よりの正伝、疑もなき事候や。答曰、今の唯一神道伝書の内には、後世の附会と見えたる所多し。相伝の書を委く按れば、兼俱卿などの儒書を牽合したるも相残れると見え、五行の配当なども有之候。

山崎敬義は、吉川惟足翁を師とし、正伝を受けて邪説の附会を廃し、伊勢を始め諸大社の古伝を索搜し、古への実伝を得たる事多し。其内にも、庚申伝の如きは、奥州会津の望月新兵衛安勝より伝へられしと也。されども、伊勢の度会延佳に從ひて、五部の書説を信ぜられたると見え、『風水草』にも専ら五部の書を引れたるは、垂加の誤と云べし。

又、上代亀卜の伝、吉田、其外にも、其伝を失へる事を、垂加翁も一生歎かれたりしが、没後に至り、対馬国の医師、京字に登り、出雲路民部に從て神学を聞し折、当時は亀卜の伝を失ひしと云説を聞て、早速下国し、雷命社に例年祭祀の折、亀卜の事有により、社家に其伝を聞て

上京し、是を民部に伝へしより、再び日本上世の龜兆の真伝を得たりと也。漢土にても、古の龜卜は伝はらずと也。

又、玉木正英の『藻塩草』、岡田磐斎の『日蔭草』の作、弥委しくして、弥古の意にはたがへる処有べきかと思はる。

夫れ、神道は吾国天皇の道にして、国史官牒の所載、まさしく可知の公道也。流義を立て、是非を争ふは、彼の兩部習合の異説と三元十八等の偽作、盛んに世に流布するが故也。大織冠鎌足の語にも、「吾唯一神道は、天地を以書籍とし、日月を証明とす」と云云。

上世、口づから伝へ来る天人唯一の神道も、後世に至り、吉田家の真伝に益潤色を加へて、古意を失へる事多かるべしと思はる。垂加翁の『原根録』、五鱗翁の『玉籤集』の作、是也。就中、五十一通の切紙伝、三十六通の口決、其外五部の書伝等には正偽相混ぜるかと思へて、疑ひ無きにも非ず。尤、十種神宝の奥秘、吉田の唯授一人伝、三種神籬の大事は、古来よりの相伝成べし。

惣じて上古は神道、天子の上のみ有て、下々は神道と云名目をだに不知して、日用に行ふ所、皆神道にて、外に望み求める事もなく、学ぶ事も無しに、外国の道渡り来りしよりやむ事を得ず、神道の名も出来り、今の世の如く神道者と云ものは、古へ曾て無しし事也。者の字を除て、皆人今日の所行、皆神道に叶ふこそ、日本人の本意とは云べき。

惣じて者の字を付てよぶは、皆一種の芸者と聞ゆる也。学者、武芸者、諸礼者、算用者、筆道者の如き、是也。当時、太平日久しく、武家の平生業とする弓馬の道さへ、芸者の部に落たる様也。まして近代世に称する神道に於をや。今、垂加翁已来、相承の諸伝の内に、後世の鑿説かと思しき所を挙て、贅せざるは、先師の伝ふる処を蔑如するに似たれば、

措て論ぜずしてやみぬ。

一 或問、当時、諸社を見るに、大方其側に寺院有て、其宮の神事祭祀を司り候。大社などには少々社司も有之共、皆其寺也。下司の様に、重き神事祈願の類は、其懸りの寺より相勤ると見えたり。殊に民間の小祠などは、仕ふる社人もなく、寺の支配と相定たるは、両部の神道より始る事に候や。

答曰、元より神に本地垂跡を立候より、出家も神に近付候て、吾が仏同前に取扱ふ事とは成来りしもの也。

先づ、愛宕の本地を地蔵とする、旧来は愛宕は元來祭る神、伊弉冉尊、火産靈尊の二座也。此神を「あたご」と申奉るは、口伝有事也。中頃、慶俊法師、京都の愛宕にて、將軍地蔵の法を修し、地蔵を安置しおけるより、いつしか時うつり、此神の本地は地蔵也と心得、其後、朝日嶺白雲寺を建て、地蔵を本尊として「愛宕山権現」と号し、以前は何神を祭れるかもしる人なく、諸国の愛宕にも地蔵菩薩を建立して、是を「あたご」と号する事とはなれる也。

又、祇園は、祭る神、三座也。中は素戔嗚尊、東は八王子、西は稲田姫也。此本地を薬師如来と云。其由来は、往昔、京師に疫癘はやり、洛中の人民、死亡する者多かりしかば、疫神をなだめんと、神代に素戔嗚尊を諸神の根の国にやらいやりし例に任せ、素尊、八王子などを神輿にうつし送り奉るの式を行はる。京中の貴賤も是に習ひて、夫々の作り物をして、同じく神やらひをなしける。其神輿をば、東山祇園の感神院に送り捨けると也。其後、時世をし移りて、感神院の本尊は薬師仏なるにより、「祇園の本地は薬師」と唱へ始ける也。六月の祇園会も此時の遺風也。如此に、最初は浅はか成る事を取立、神に皆本地を建立し、自然

と本院より神社を支配する事とは成れるもの也。

古へは神田、社領も有之、社家も繁昌し、従類眷属も多かりしと見え、乱世の砌りは、一方の味方をも致し、士卒を引具し、戰場にも望けるが、其身も討死し、子孫も衰微して民間に落おれ、相伝の神領をも他人より奪はれ、神社も破壊して、祭も絶たるなど有しを、近辺の寺院より是を支配し来りしまゝに、当御治世に及んでも、「宮司坊」など、称して、神事祭祀にも預る事と成しもの也。

扱、「社家」と称するも、多くは神道を不知して文盲なれば、古へを考る力もなく、喪祭の式も不知ば、死しても僧を頼み葬礼を取行ひ、仏間を飾り、位牌を立、何居士と改名し、年回月忌の廻向をする通りに成り果たるは、仏道に落入り、己れが店を人に奪れたる也。たとへば、己れが財宝を盗に取られ、吾も同じく盜賊仲間に入たる同前の有様也。

一 当時、民間の家毎に大黒、恵比須を祭る有。是に付て紛らはしき説其多が故に、二神の事跡を考へ顕すのみ。

先、今世俗に崇る大黒は、仏法渡りて後、浮屠氏の天部に有てふ大黒天を、日本の大己貴神に附会せるもの也。抑、吾国の大己貴の神は、素戔嗚尊の御子にて、稲田姫の御腹に御出生也。上世、西国を悉く領しまし／＼けるを、鹿嶋、香取の両神、天照大神より神勅を承り、国を献ぜらるべきや否やの問答有ける時、其子事代主命の諫めによりて、国を献じて退き給ふ。

其後、「大和国青垣三諸山に住んとおぼす」と宣ひて、彼所に宮作り住しむ。是、今の大三輪の大神也。『延喜式』神名帳に「大和国城上郡大物主神社」と有、是也。此神は杉立る山を御神体とし奉るにより、拝殿斗りにて宝殿なし。古へ此所にて酒を造り始めたるを以、酒を古へは

「みわ」とも称せり。『万葉』の歌にも「みわすへ」など、酒をよめる也。後世、酒うる家の印に杉の葉を軒に釣るも、此三輪の故事より出たる也。唐土の酒簾の意也。又、「三輪」と文字を填るも古事有。

此神、天の羽車と云大鷲に駕して茅渟県に下り、大陶祇の女活玉依姫に往かよふ。此女妊身により、父母怪で問之。女答曰、「あやしき人のよそひして、家の上より入り来ると共に伏せり」と云。其時、父母其形を見顕さんと、うみたる麻を針につけ、神人の裳すそに縫付しめ、糸のまにく尋見れば、鑑の穴よりちぬ山を越へ、吉野山に入り、三諸の山に留るを以、大神なる事を知れり。其糸三わけ残れるを以、三輪の山と名付ると也。「ミワ」はみわけの略語也。

其御子も同じく大己貴命と云。二代御同名也。此御神稲羽の八上姫に通ひ給ふ時、負袋行給ふ事有。又、出雲の須世利姫に通ひ給ふに、其姫の御父神、鳴鏑を大野の中に射入れて其矢をとらしむるにより、野に入給へば、四方より野に火を付て此命を焼殺さんとするが故に、遁出べき方なく迷ひ給ふ時に、いづくより共なく鼠共多く来りて、「内はほらく、外はふすく」といふにより、其処を踏給へば、地中に落入り、穴の中に隠れ居給ふ。其間に火は其処を焼過て、難を通れ給ふ。鼠共、又鳴鏑をくはへ来るを取て、其矢を御父神に奉り給ひしと云事、『旧事記』に見ゆ。

かゝる古事有により、大こくは、衣服頭巾などみな日本人の姿にて、袋を負給ふ也。又、鼠を愛し給ふといふも、右の訳有故也。『抱朴子』に曰、「鼠は寿三百歳を有つ。百歳に満る時は色白く、能一年中の吉凶及千里外の事を知」と云云。

又、御勢ひきく小さくましますにより、蘆原の醜男命とも申。広矛を

以天下の悪神を退治し給へる時には、八千矛神共申武徳の神也。御子、百八十一神まします也。

往昔、西国を領し給ふ神なるが故に、此神は西に向ひて立給ふ。福徳の神故、大物主の神共申。神代の西伯にて、地神の頭と成給ふ故、大国主神共、大名持の神共申。今日本の諸侯方を「大名」と称するも、「大名持」の名目より起れるにや。又、『左伝』にも「美城大名也」と云云。

又、大こくは「大己貴」の字音也。後世、漢字有て後、字音を以唱へたる也。此神、七名有内に、「大己貴」「大国主」「大國玉」、皆「だいこく」の字音備はれり。古へは「おほなんぢ」と唱へしにや。是、「大あなむち」「大なもち」の略成べし。古歌に、「大なんぢすくな彦なのあれませる」とよめり。播州石の宝殿の縁起に見ゆ。然るを、天竺の大黒天を附会して、異国の神とするは、いはれなき事也。此神の真言とて「ランマカキヤラヤソワカ」と云は、「マカ」は「大」也。「キヤラ」は「黒」也。「大黒」と云事成べし。此真言は、さるがしこき日本人の拵へたるもの成べし。

又、恵比須に二神有、紛れ安し。一神は伊弉諾、伊弉冉尊の御子、蛭子の神也。御出生の後、三歳迄、脚立給はず、柔弱の神にてまします故、鳥の岩くす船にのせて、風のまにく放ち捨させ給ふ。其流れ付給ふ所、今の撰州大坂西宮の恵比須、是也。蛭子に訓伝有。日入子の略也。日の入る方は西なるが故に「西の宮」と号し、陰徳の神にてまします故、御宮を南向に作る事なし。

推古天皇九年、聖徳太子、六斎日に市を始め、交易せしむ。蛭子神を以、商売鎮護の神とす。福徳の神にて常に笑ひを含み、人をいさませて、

等の語、後世學問の淵源とすれ共、皆『古文尚書』の文なれば、晋、隋、六朝の儒者の偽撰に出たるもはかり知られねば、信じがたし。

二帝三王の教を設る、専ら天下の人をして、各「親其親」、長「其長」を第一として是に告るに、人の心、人の性と云の語なきを思ふべし。

惣じて古聖人の治は、民の心を以心として、吾聰明を表に顯さず。此故に、民、鬼神を信ずれば、以「鬼神道」設「教」、民、卜筮を貴べば、卜筮の法を設けて、吉凶悔吝の道を知らしめたるもの也。

一 六經の名、始て『莊子』天運篇に出たり。其後、五經、七經、九經、十三經など、時代に隨て損益有。「孔門の七十子、六經に通ぜり」と始て『史記』に見えたり。

『詩』『書』の二經の大略を云ば、先づ『書』は、古へ國家に大事有時は、是を記録して後世に残す。其体に、典、謨、訓、誥の別有。四代の聖帝明王、天下を治るの大經大法にして、万世帝王臣民の法とし、従ひ守の道也。是を読ざれば、人道の本づく所を知らず、政治の出处に通達する事かなはざる也。

『詩』は、宗廟、朝廷に樂章有、民間に歌謠有、是を取り集めて風詠に備へたるもの也。其義、六有。其詩は、人情を有のまゝに詞に發し、作り述たるもの也。此故に、國家風俗の盛衰、政治の險易、節物氣候の変、鳥獸草木の名に至る迄、つぶさに備らざると云事なし。是を読まざれば、世に交り人に対してよく物いふ事あたはざる也。

故に、古の學は、先、此二經に通ずるに過ぎる也。後世、勸善懲惡の説有は、古へには無しし事と見ゆ。『詩』はもと人を教ふるの書には非れ共、よく人情を尽せるが故に、人情を知らざれば、人に交る事難きを以、其人情を知らしめんには、『詩』に過たる教は無きもの也。「古は三千余

篇有しを、孔子刪去て、其内三百余篇を取」と云説は、始て『史記』に見えたり。され共、春秋列國の士大夫、詩を賦する、皆、今の三百篇の詩にして、逸詩を云ものは稀也。孔子も「詩三百」と稱するのみ。

又、『易』の一經は、元來、占と義理との二義有。繫辭曰、「君子居則觀其象、而玩其辭、動則觀其變、玩其占」云云。象伝曰「下は、往昔、易家の人、各見る所を記して、其義を述たり。今の十翼と云、是也。繫辭曰、「易之興也、其於中古乎」云々。然れば、卦爻、象象の作、何れの世、何れの人に成ると云事を知るべからざる事也。「文王、象を系る」と云説は始て『荀子』に出、「周公、象を作る」は馬融、陸績の説に起り、「十翼の孔子に成る」といへるは司馬遷の説也。

又、『春秋』は、「孔子感麟作」と云。もし麟不出ば、『春秋』は不作してやむべきや。且、天子の事と云ものは、礼樂、征伐は天子行ふ所の政事なれば、孔子、匹夫を以、是を記せるが故に、「知我、罪我」の語有もの也。「南西の權を託して天子の事を行ふ」といへる説は、いかゞ成べし。孟子の語に、「王者之跡息而詩亡、詩亡春秋作」云云。蓋し殷周の盛んなる世は、人の心直にして、世の中の善惡に付て、そしるも譽るも、有のまゝに隠し忌む所なし。此故に、詩を作る者、其本心を吐き顯して、是を諷詠す。是、三代の直道にして行ふ所也。其已に衰ふるに及んで、風俗陵夷し、世の中の事、隠し忌事多く、あらはに云べからざる事のみ有により、ほめそしるも実ならず。故に「王者之跡息而詩亡」と云。孔子、此時、魯史によつて筆削して、僭亂を退け、名分を明にし、是非を正して後世に伝へ、天下の乱臣賊子、畏れ忌所有て、其志をほしめ、にする事を得ざらしむ。是、則儼然たる一經にして、『詩』『書』と相並べて教を後世に垂るもの也。

又、『礼』『楽』の二つは、人々しばらくも身を離れざる業也。二帝三王、各礼楽の制作有。皆、天下の風俗を維持するの具也。一身を脩るに取ては、礼は人の身を檢束する法にて、楽は人の心を發揚するの物也。經礼三百、曲礼三千の条数有も、周に至て全備せる也。其詳なる事は、三礼に考て知べし。楽に古今の変有事は、徂徠の『文集』、春台の『經濟錄』、近代刊行せる『礼用記』等に詳なれば、爰に贅せず。

一 孔子、衰周の世に出て、聖智兼備といへども下位に有て、政を天下に施す事を得ず。堯舜を祖述し文武を憲章して、六經を修し、七十子に残して後世に伝ふ。実に天下万世、帝王臣民の師表とするもの也。其聖人たる事、宰我、子貢、有若の孔子を評せる事、『孟子』の書に詳也。

孔子の當時には、「東家の丘」など、いやしめ、子貢と何れか賢也と疑ふ者も有。後漢の王充が如く譏るも有といへども、其盛徳大業は、孔子の後に再び相似たる聖人有事なし。

昔、齊景公、謂子貢曰「仲尼賢なるや」。答曰「聖人也」。景公笑曰「其聖と云事、如何」。答曰「不知」。景公曰「始は聖人也と云、今、不知と云は何ぞや」。答曰「臣終身天を戴け共、天の高事を不知、終身地を踐共、地の厚事をしらず。臣が仲尼に事ふる事、渴して壺を取、江海に臨で飲が如し。吾腹満て去る。争か江海の深事を知んや」と。景公曰「足下の仲尼を譽る、甚過たるに非や」と。答曰「臣が仲尼を譽るは、両手に土を捧げて泰山にたくらぶるが如しといへると也。智以足知聖人」と云。

子貢が孔子を称する事、如斯なれば、孔子、堯舜よりまされる事遠しと云も、さる事にて、後世の人君、文宣王と諡せしも、又宜ならずや。又、明人の説に、魯国の曲阜の孔林は、孔子を葬し跡也。七十子、諸

国より奇草異木を携へ来て植置しが、今其名を不知の木有と也。孔林十里の中は、其木、天に参り、上に鳥巢なく、鴉声なし。下に荆棘蒺藜の刺人草なしとかや。是、聖徳の万世に及べる奇瑞也。

又、孔廟の中の檜木は、聖人の手づから植置る也。周秦漢晋の代を経、ほとんど千年、懷帝の永嘉三年に枯る。枯る、事三百九年、子孫是を守て動さず。隋恭帝義寧元年に又生ず。生ずる事、五十一年、唐高宗乾封二年、再枯る。枯る、事三百七十四年、宋仁宗康定元年に復榮ふ。金宣宗貞祐二年に、兵火に焼れて失たり。後八十二年、元世祖三十一年、故根より又發す。明太祖洪武二年迄九十六年、茂盛して其高き事三丈余、圍四尺許り。弘治の頃、火に焚る。今、枝葉無しといへ共、直幹朽ずして未だ枯ず。聖人の手沢、其盛衰、天地の氣運にあづかるにやと云云。

孔子の子孫、代々儒を業として、世に名有人多し。『闕里志』等に詳なれば、略之。後世は衍聖公と称して、宋、元、明の乱世にも、其家系は連綿して、清朝に及ても絶る事なし。

近来、清の康熙帝、諸国巡狩の序に孔廟に謁せられ、衍聖公に女子壺人賜り候半、太子に配し度よし有之けれ共、固辞有に付、無力、還幸の後、「衍聖公を燕京へ召し候」と申来り候へば、何れもあやぶみ、孔廟にて筮せられて後、上京有りしに、詔り有けるは、朕は元と夷中より出て、今、天子と成り候。中国は世々聖人の後にてうけ伝へられたる国に候へば、願くは聖人の後と太子を配し、太孫も出来候はん時には、世の為に可然かと望候へ共、固辞の上は不及力。但し、聖人の後たる人の夷人と婚姻をゆるすまじきと思ひつめられたるは、さすがの事と感じ思召候由にて、種々の拝領物など有て、道中の送迎まで、丁寧成馳走有しと也。

又、天下の学宮に図画せる先聖の像は、唐の呉道玄に始る由。鬚髯甚だうるはしく凶せり。されども、孔子の孫、子思の齊の君に告し語に「先君、生れて鬚眉なし」といへるを以考れば、孔子の像に鬚髯を画せるは後世の誤成べし。

又、清朝は奴兒干ヌヅカシの北狄たりといへ共、聖賢を重んずる事は古へに減ぜずと見えたり。今も『論語』をよむの童子に句読を授る時、孔子の名「丘」といふ字にあひては、某と云字に作りて教ゆと也。是、聖人の名を犯す事を憚る処也。又、今、清刻の書には、「丘」の一面を省て「丘」に作ると也。

今、長崎に来る清の商人を聞に、仏寺に詣る時は、途中雑談し、行歩も前後しどろなるが、聖堂に謁する道すがらは、行歩正しく、雜戯もなく、いかにも靜に慎んで行しと也。

又、渋紙を足にて踐フマずとかや。是、文字を書く反故を以拵へたる物故成べし。是、自然と文国に生れ、聖人の貴ぶべきを知らるといひつべし。

一 三代の聖人は専ら天道を重んじ、礼楽刑政の設け、宮室器服の制、必象を天地に取、或は日月星辰に法り、或は四時五方に准らへて、古へは十二章の服用。明堂の九宮、『周礼』の六官の如く也。又、賞するに春夏を以し、刑するに秋冬を用ふる等の事に至る迄、平生競々キヨウク業々として、唯一毫もあやまちなからん事を恐れ、謹まざるはなく、道を以天下に臨んで、道を以天下に告敷くと云事はなかりしに、孔子に至つて、下位に有ば道を以天下に臨事かなはず。堯舜の天下を治たるの道を相述し、文王、武王の跡を考へ、其道を以自らの任とし、天下万世に告て国家を治る人の規範たらしむる事は、孔子より始る也。

其道と云は、則人倫日用の道也。是を教ふるの術、又一法に非ず。仁

といひ、智といひ、礼といひ、義といひ、勇といひ、信といひ、忠といひ、恕といひ、恭といひ、敬といひ、中庸といふの類、其名目多端也といへ共、歸する処は一也。故に「吾道一以貫之」といへり。百行をすべ東ねて是をいへば、道といひ徳といふ。日用五倫の交り、貴賤上下共に通行する場所をさして、是を道と名付く。路をふまずしては、西へも東へも行事かなふまじ。其通行の道と云は、子としては孝、臣としては忠といへる如く、各相応くの道筋を示し教たるもの也。

又、百行の内、各自得したる処を名付て是を徳と云。孔門の教如是なれば、諸弟子皆平生の業は、礼楽を学び、詩書を誦するの外、聖人の一言一行にも心を付、是に法り効へるもの也。実に生民有て已来、孔子の如く道徳備はり人を教諭するの法、詳なる人は、数千年來、終に聞事なし。

孔子の人を教ふるは、良医の方を用ふるが如く、其人の病に依じて、君臣佐使の方、其宜をはかつて一味配剤も有、多味を加減して甘苦温涼の薬性に随ひ、百病を療するにひとし。或は仁を説き、智を説き、又、道徳仁芸の四つを列ねて示し、詩礼楽の三つを并べて教ふる類也。

後世の儒学は、平生仁義礼智孝悌忠信を説いて人を教導すれ共、賢人君子と称せらる、程の者、壺人も出来る事の無きは、下手医者アサシの病源を察せずして薬を与ふるが如く、万病を治するに一方を以し、平生附子人參を用ふるが故に、終に其効無也。

古への学問は行作の上に有て、聖門の高弟、皆孔子の言行に法つて吾身の定規テグシ手本テボとしたり。孔子の姉の喪有時に、拱コウて右をうへにせるを見て、二、三子も皆右を上にしたると云にて知べし。又、「弟子、誰か学を好」と云の間に、孔子答て、顔淵の「不遷怒」「不遷過」の二つを

挙て、好^レ学と称せるにても知べし。

後世の学問は、師に附て、書を読覚えて、天地万物の理を究るを学問と心得て、古への賢人君子の人となり慕^シふて、其行作を学び、吾身日用行事の根本とする事を知らざるもの也。惣じて人のなす処、善悪の二つに過ず。此故に、学問の道は、善を長ずると悪を除くとの二つを出ず。聖賢の人を教導する、専ら善を長ずるを勤として、悪を除く事は急務とせず。後世の学問は、悪を攻^セる事ばかりを勤として、善を長ずるの事に疎^トし。是又、古今學術の同じからざる処也。

一 唐虞三代の治は、道と一にして二つなし。周衰へて戦国を経、先王の礼楽、廢して行はれず。秦に至て、書を燔^ヤき儒士を殺すにより、聖賢の道、地を掃^{ハラ}つて尽たり。漢興つて、詩書の道、漸く行はれ、儒術を尊信するといへ共、法度改令は古によらず、先王の遺文は儒者の事業と成て、其道、天下に行はれず。此時より、治と道と二つに分れて、道は只、学者の一分の身に行ひ、口に誦し、書に筆するのみにて、博士の業と成りし也。是、中華に於て古今学問の一変也。

又、戦国秦漢の頃より、讖緯^{シシイ}の学と云もの起れり。其書は、隋の代に至て、大方亡びて伝はらずと也。

漢の劉歆^{リウキン}は、天下の書をすべて七略に分てり。此頃より諸子百家の説起り、各門戸を立て是非を争ひしが、六朝を経て、詩賦文章の作、稗官小説の類に至る迄、時代の移り行に従ひ、二千余年を過るの間に學術も漸々に変化せし事也。

先づ、漢興て經術の士を尊ぶの故に、義理を知る者、多く王莽^{モウ}が乱にも節義を守るの士多し。後漢も又、經術を重んじ、名節^{メイ}を貴ぶの風有により、其亡ぶる時に節義を守て死を致す者多かりしを見て、兩晋の世に

は經術を廢し、黄老の道を尊び、放蕩^{ハウダウ}の風多く、易に老莊の学を交へて清談など云事興り、竹林の七賢など、称し、浮虚^{フキョ}を旨とし、聖人の礼法を廢す。礼法已に亡びて、夷狄と同じきに至る。是、五胡、華を乱るの根本也。

又、後世、理学の源は、後漢の頃より根ざせると見えたり。先づ、王充が『論衡』^{カフ}、皆理をいへり。兩晋の清談も、専ら玄妙の理を云事を重んず。南北朝の間に、華嚴宗^{ケゴシキウ}起りて、理事無碍^{ムゲ}、事理無碍^{ムゲ}の法を説く。隋唐の間に天台宗^{テイサイ}起り、円頓止觀^{エンドンシクワン}の法を説く。皆、理学也。儒仏の道の主意は異なれども、理を説來る事、久しき事也。趙宋^{テウ}の代に至り、周張、程朱の輩、専ら性理の学を説く。是又、一流の家学也。

一 六經の内、誠をいはず誠をいふ事、『中庸』に始る。孔子は、仁と説。子思、孟子に至て、仁義相并べていふ。尤、『易』の説卦伝に「仁義」と云語有共、十翼、孔子の作に非ると云を以考れば、説卦にいふ処、孟子の時代と何れか先後と云事、知るべからず。子思は仁義礼と云。孟子は仁義礼智といひ、又、仁義礼智樂と云。後世に五行五性に配する如きの説は、此時迄は無^レ之。

『樂記』に曰、「春作夏長^{スルハ} 仁也」云云。仁義礼樂の四のものを四時に配す。是、後世配当学問の始祖也。礼運に曰、「人者其天地^レ之德、陰陽^レ之交、鬼神^レ之会、五行^レ之秀氣也」云云。人、五行の氣を受けて生ると云説、此に始る。然共、未だ五行の氣を人の五性に配すると云事はなし。

『樂記』に曰、「合^二生氣^一之和^一、道^二五常^一之行^一」云云。五常の名目、始て是に見ゆ。鄭玄^{テウヘン}の註に「五常^ハ五行也」と有。又、漢武帝の時に、董仲舒^{トウシュ}曰、「夫、仁義礼智信^ハ五常^レ之道」云云。是、後世に云五常の始也。然れ共、漢の時に五常を五行といひ、又、仁義礼智信共云。未だ此頃迄は

定説無ししと云べし。され共、五常を五行に配当するの説は無りし也。信を以、仁義礼智に并べて五常と云事は、董氏の言に始る也。

一 『洪範』の五行、水火木金土の五つ也。其用を挙て、水を潤下といひ、火を炎上と云。其味は水を鹹し、火を苦しと云の類のみ。各其品を別ち、是を五にくりて官職を立て、其事を司らしめ、天下を治るの具としたるもの也。五行に穀を加へて、禹の時には六府と称し、経済の分職としたり。後世の学は、陰陽両儀分て五行と成り、気天に行はれ、質地に具り、散じて万殊となり、人、物、各其理を受けて性とすると云て、皆数を五にとれるもの也。『洪範』には五味をいふのみなるに、『左伝』鄭の子産、始て五色、五声に配せり。晋の蔡墨は五行の官といひ、又別に五祀を挙ぐ。則五行の神也。『国語』魯の展禽の説には、「及地五行、所生殖也」といへり。後世家の、天陰陽五行を以、万物を化生すると云説には異なるもの也。

又、『漢書』東平王宇伝に曰、「夫人之性皆有五常、及其少長、耳目牽於嗜欲。故五常銷而邪心作」云云。如此なれば、漢の時、已に性に五常を具へると云説有りし也。又、後世、本然の性、氣質の性、天理人欲の説も此頃より漸く根ざしたると見えたり。

又、五行を以、五常四時に配し万物に推す事、『月令』『左伝』に始り、鄭玄が『中庸』の註に至て詳也。此時分に成てより、古への事の上に随つて教を設けたるの学一変して、人々五常を性に具し有てる物となれり。此説、一たび興てより後世に伝へて、千余年の間、其故轍を改る事あたはず。

又、班固氏の『白虎通』には、五常を以、四方、四時、五音、五色、五臟等に配して、益委しく詳に成りし也。尤、五行を五常に配するに、

二説有。鄭氏は水を以信とし、土を智とす。班固氏は水を智とし、土を信とす。宋の程朱は、班固の説に従へり。

又、「天一生水、地六成之」の説は漢に起れり。『易』の繫辭には、只「天一地二」とのみ出たり。其「天一水を生ずる」と云ものは班固に始り、「地六成之」と云は鄭玄の説に興れり。『易』は只、両儀三才、四象八卦を説て、五行をいはず。五行の説は『洪範』『月令』に興れるもの也。

一 漢より已来、五行の説弥委しく詳に成て、日本、朝鮮、琉球にも其説を伝へ、天地世界の間、此五つに括てもる、事無き様に覺えたるは、一偏の小見也。

亞細亜一世界の内にてさへ、莫臥兒、応帝亞の諸国は、地水火風を以四行と号して、唐山の五行の説を知らず。モウル、インデヤは古への印度の地にて、今は専らマアゴメタンと云天神の教法盛んに行はれて、浮屠の法は廢したりと云り。又、歐羅巴州の諸国は、水火氣土を以四行と立、キリストヤンと云天主の教法有と也。

然れば、世界万国の大なる各其學術も有と見えたり。今、日本、朝鮮の如きは唐山流の儒学を用ひて、陰陽五行の説を尊信し、此外に各其国学有事を不知也。

一 元亨利貞を四時五行に配する事は、唐の孔穎達に始り、復性の説は李翱に始る也。其本づく処は、『莊子』『淮南子』の「復其初」といへるより出たるもの成べし。李翱は韓文公を師とせる人なれども、仏老にも帰せるが故也。

宋朝に至りて學術一様ならず。蜀党、洛党など称して、各門派を別てるも有。閩閩濂洛の学も又大同小異有といへ共、皆聖賢の道を自ら任と

して、王佐の才也しか共、一人として相位に登る人なく、崇寧の間には蔡京等が輩、司馬温公、蘇東坡、程明道などをさして姦党とし、慶元の間には韓侂胄が輩、朱子を偽学と称するの類有、一々枚挙に遑あらず。大抵、周子の学は、易を祖とし、無極、太極の説を始む。「無極之真妙合而凝」と云へるは、華嚴合論に出たる語也。無欲、主静の説は、老子に本づけるもの也。先づ周子は太極を主とし、程子は理を主とし、邵子は数を主とし、張子は太虚を以万化の本とす。

朱子は太虚を以太極とす。張子の意には背けり。張子は天地の性、氣質の性といへり。程子は「性即理也」と云。朱子祖之本然氣質の名を立、天地の性は理を指し、氣質の性は理と気を雜といへり。未発の性は程子に始る。「其本也、真而静、其未発也。五性具焉」といへり。其説、深く精くして、漢唐の諸儒の及ぶ処に非ず。然りといへ共、五常の性に具る、見聞する事あたはざる。たとへば、声の鐘の中に、火の石中に有が如くにして、其名有てつねに其物無に至れり。

漢唐の儒は、性を氣稟と云のみ也。程子、又体用の説、道体の説有。仁に偏言專言の説有。「体用一源、顕微無間」と云は、『華嚴』の疏に出たる語也。朱子の学は、居敬究理を主とせり。

惣じて、漢已後より黄老の教へ盛んに行はれ、南北朝より浮屠の説に惑ふ人多し。虚無を崇び邪説を信じ、敗亡に至るに及んでも悟らざる人有。北齊の元帝は、後周の兵に困れて甲を着しながらも、猶『道德経』を講じ、梁の武帝は侯景が為に逼られても、惟空理を談ぜられしの類也。唐の裴休、白居易、柳宗元、宋の富弼、趙抃、王荊公、蘇東坡、黄庭堅の如き、皆仏を尊信せり。

濂洛閩の諸儒興るに及んで、法を孔子に取て、仏老の道とすべから

ざるを云。宋儒の功、此時に於て大也と云べし。就中、朱子に至て群儒の大成を集めて、其学高明を極め精微を尽して、漢唐諸儒の附会を退といへ共、未だ仏老の緒余を免る、事あたはず。「大学」の「明德」を解して「虚靈不昧」と云は、『智度論』に出たる語也。又、「一旦豁然貫通」の語意、是、釈氏の禅学に同じ。

又、象山陸子は朱子に不服といへ共、心学也。立言の旨不同といへ共、理学也。其語に曰、「宇宙乃己分内事、宇宙便是吾心四海有聖人出焉。此心同也。此理同也」云云。陽明王子、吾心の良知を主として「究理即是明明徳」と云。皆、禅学に近きもの成べし。

先、唐虞三代の学は秦に亡びて、漢に再興すといへ共、上に聖賢の君なく、学問は皆儒者の業と成て一変し、仏老の道も又行はる、に従ひ、諸説区にして正しからず。宋に至て、性理の学興つて学風又一変し、理を推して天地万物の道理を尽し、持敬脩心の省察工夫を大事にし、言行は聖賢を法とするの故にや、君子の儒も多く出来て、賢才を以称せらる、人物の盛んなる事、古今の間、宋朝に及べるは無しし事、偏に學術の然らしむるといふべき也。

一 『孟子』の一書、漢の始めは尊ぶものなし。『荀子』非十二子の篇、子思、孟子を評せり。王充が『論衡』刺孟の篇有。宋の司馬温公「疑孟」有。李觀太伯が「非孟」有。晁説之以道が「詆孟」有。黄次伋が「評孟」有。馮休が「刪孟」有。『史記』にも、孟軻を鄒衍と相ついでたり。

楊子雲始て尊之、其後、韓退之推崇で「功禹の下にあらず」といへり。宋の程子に至て、益尊之で、『論語』と相并べて「語孟」と称せり。

蒙古、中国に入て太元と称せしより、今にも中国の飲食を学び、中国の経書を求めるの内、独り『孟子』の書なし。もし其書を携へて行者有

ば、舟則くつがへり溺るゝと也。是亦、一奇事と云べし。

一 吾国、文学有の始は、人皇十六代応神天皇十六年に、始て百済国より阿直岐アツキと云者を遣はし、良馬二疋と『論語』十卷、『千字文』一卷を奉らしむ。仁徳帝、其時に太子たり。此阿直岐を師として、始てもの学びし給ふと也。其翌年に、又博士王仁ワニを奉る。宇治の稚郎子ワカシラコは、王仁を師とし、もの学び給ふと也。

古註の五経伝来の事、二十七日ケイテイ代繼体天皇の三年に、百済より五経渡る。同七年に五経の博士段楊爾ダンヤウニを奉ると也。三十代欽明天皇十五年、百済より五経博士、易博士、曆博士、医博士等を渡す事有。

三十二代用明天皇の時、聖徳太子、百済の覚哥ガクカを師として経伝を習ひ給ひ、よく和漢に通じ給ひて、梵文に対訳する如く、儒書に始て訓点を附給ふ。「論語」の如き、左の傍に「ロムゴ」、右の傍に「アゲツライカタルコトバ」と付給ふ。已下の章句一々に、其義に随て訓と音を付給ふにより、日本人、吾国の語を以、漢字をよむ事を得たるは、偏に太子の大功也。

一 本朝学校の設有事は、三十九代天智天皇の御宇より始る。是を大学寮と云。孔廟も同時より有と見えたり。今の京に成ては、二条の南、神泉苑の西に有と也。勸学田カンガク百廿余町を置る。其後、又大学寮の料に、諸国に課せて納る処の稲幾万米と定有。今の現米にして四千七百九十石也。学生の料に千五百五十石と定られたる事も有。諸国各学校有。学校田有。

下野国足利学校は、小野篁の建立と也。諸国の学校は、七十二代白河院の御時に、頽破タイハするを愁て、藤原敦光フジノノリ、修覆の事を申奏状を奉るといへ共、帝深く仏法に帰し給ふが故に、修理の沙汰もなかりしが、其後保

元平治の乱となり、皆跡もなく成りしか共、只足利の学校のみ残れり。然共、是を守る儒生乏して、中頃よりは釈氏をして兼帯せしむ。足利義兼再興して、理真上人を招入、真言密宗を学しむ。其後、或は済家の僧住持すと也。

帝都、大学寮の孔廟は応仁大乱の時絶ぬるとかや。応仁より四十余年を経、永正年中迄は孔廟の基址猶存して、神泉苑の西北茶園の中に有しと也。

一 中古は文学盛んに行はれて、源氏の学問所、淳和院ジュンワ、奨学院シヤウガク有。三条壬生の西に有しと也。此両院の別当は、古へ村上源氏の長者たる人、此職に任ぜられたり。其後、清和源氏より此職を懸給ふ。後小松院の御時、鹿苑ロクワン義満ミツ公、永徳三年に両院の別当、源氏の長者に任ぜられしより、公方家代々の重任チカシムとして、今の將軍家も此職を御兼帶有事也。

又、橘氏の学館院有。京の西、今の梅の宮、其古跡也。藤原氏の勸学院有。二条の坊城に有。和氣ワケ氏の弘文院有。今は皆名のみ残れり。

釈奠シヤクケンは、四十二代文武天皇モンムの大宝元年より始り、九十四代花園院カノエ迄行はる。其已後二百余年断絶せしを、後光明院の正保慶安の頃行はれしかども、其後又絶たり。此帝は儒学を御尊信有しが故也。本朝釈菜の式、其詳なる事は『江次第』『延喜式』等に見えたり。聖像、先師の画像は、吉備大臣入唐帰朝の節、唐の弘文館より携へ来り、太宰府の学校に安置し、百済の画師に命じてそれを写し、大学寮に祭。又、金岡カナノカが十哲の像も有しが、八十年代高倉院、安元三年の火に焼失せりと也。諸国の学校には先聖、先師二座ばかりを祭る。太宰府には関子セシを加へ、三座祭れりと也。凡、諸国の学校、春秋の釈奠には酒、脯ホ、鯪アハヒ、菓子等迄、官より被相渡事也。

一 本朝文官一通りの儀は、式部省の任にて唐官の吏部に当れり。此故に式部卿を懸給ふ。親王を吏部王と云。大学寮も式部の属官也。先、大学寮に四道の学を分てり。

紀伝道は『廿一史』『文選』等を勤、唐の翰林学士の官に当る。此下に文章博士と云もの有。献策の人を秀才と云。是より転じて此博士に任ずる也。文章生、得業生と云者、此下に有。

明経道は四書、十三経等を勤む。明経の博士有。唐の大学博士に当る。中古より清原、中原の両家、是に任ぜらる。学士の器量を試る司也。一条くを挙て問を立。十ながら通ずるを上の上とす。八を上の中、七を下とし、不通は不第とす。寮の試みて詩文、経学を試みて及第する也。十の内八に通ずる者は太政官に送て、官人と成也。此下に直講と云有。字を正し、読方を正し、義を正し、講談する役也。書を講ずるに日限有。『礼記』『左伝』は七百七十日、『周礼』『儀礼』『毛詩』『律』は四百八十日、『尚書』『論語』は二百日、『孝経』六十日と定有也。又、音博士と云有。四声、五音、漢音、呉音を正す役也。音生有。又、書博士と云有。能書の人を任ぜらる。真行草を正し、手跡を教る役也。書生有。明法道は律令格式を教ふ。明法博士有。唐の律学博士に当る。刑罰、服忌を考て指図をする也。明法生有。

算道は曆術天文を始め、諸国の御調物の勘定を司る也。算博士有。唐の算学博士に当る。算業生有。大抵学生四百人、年十三より十六已下の俗利なる者を式部より撰みて学寮に被入也。九年の功にて学業不成就ものは故郷に帰さる、也。又、学寮には典葉寮より医師壺人付居る也。

禁裏の御書物、三年に壹度づ、虫干有。学寮の人は頭に申て何の書にても拜見御免也。

又、大学寮に東西の二局有。菅家と江家の任也。東には菅丞相の像を安置し、西には大江維時の像を安置せらると也。

又、六十六か国、各国学有。都より講師壺人づ、下り勤る也。博士醫師有。其学生、大国は五十人、医生四十人、上国は学生四十人、医生三十二人、中国は学生三十人、医生二十四人、下国は学生二十人、医生は十六人と定らる。此国学生より秀逸の人は多らび上て、都の大学寮へ入る事也。

又、学校中にて各長幼を以次第を立。又、初て入学する者は束脩の礼有。其師には布壺反と酒食等の定め有事也。又、寮中に於て琴を弾じ、射芸を稽古する事を許す也。学生も一月の内に三か日の休息有。又、師の教に従はず休暇百日に及ぶ者は、学生を退けらる、定め也。

一 古へは諸国の郡毎に軍団と云ものを置て、農より兵を撰み上て、武を講ず。五人を一伍とするより、五十人組、百人組と、段々積り上、五百人以上千人迄の備をこしらへ、其内より京都へ上つて、皇城を守護したり。是を衛士と云。軍事有時は、大將軍に従てさし向らる。『太平記』の頃迄は、此遺制残りて、四十八か所の箒と号して、諸国より登りて勤めたりと也。

扱、国に残れる兵は、其国所々の要害の土地を警固したり。又、騎兵、歩兵の分ちも有。軍団にては武を習はし、国学にては文を教、文武の道、全かりしと聞えたり。

一 古へ朝廷にも文学を修め給ひし事共、古史に記せる大略を按に、仁明天皇の御時、文章博士菅原清公、『文選』『後漢書』を侍読せらる。侍読とは、其書を天子へ授け奉るを云。

又、文章博士春澄、宿祢善繩、『莊子』を侍読す。又、善繩に『漢書』

を讀しめ給ふ事有。文徳天皇、「晋書」を善繩に講ぜしめ、帝も自ら受け讀給ふ事有。滋野朝臣安成に老莊を講ぜしめ給ふ事有。清和天皇は、直講苅田安雄に『毛詩』を講ぜしめ、明経博士春日朝臣雄繼、「孝經」を授奉る。助教布瑠宿祢、「尚書」を講ず。又、天皇始て『論語』を講じ給ふ事有。直講葛井連、「左伝」を講ず。直講苅田安雄、「御注孝經」と『周易』を講ず。又、直講船連、「礼記」を講ず。雄繼、「毛詩」を講ず。又、皇太子始て『千字文』を讀給ふ。天皇自ら「群書治要」を讀給ふ。又、菅野朝臣佐世、五経を授奉る。天皇始て『史記』を讀給ふ。大江音人、侍讀たりと也。陽成天皇は、善淵朝臣永貞、「御注孝經」を授奉る。天皇始て『論語』を講じ給ふ。皇弟貞保親王始て「蒙求」を讀給ふ。橘朝臣広相、侍讀たりと。

如此事、国史に詳なれば一々枚挙に遑あらず。

一 古へは、世間に紙筆少なく、甚だ大切に、人の精神強く、志厚かりしと見えて、記憶も後世の人の及ぶ所に非ずと也。

仏経などを写すに、源平の諸将、名有輩、或は一紙、或は二紙を寄進有に、紙の背に各其姓名を書付有しと也。今は紙筆、甚自由にて、書も沢山なれども、書を大方に看過して、一部も諳記せる人稀也。

古へ、勸学院の学生集りて酒宴しけるに、各議しけるは、年齢、座なみをもいはず、才の次第に座には着べしと定めける時、隆頼と云人、進んで上座に着たりければ、皆人「いかに」といへば、隆頼の云、「『文選』三十卷、四声の『切韻』、暗誦の者有は、速かに隆頼が上に着べし」といはれければ、皆人口を閉て進まざりけると也。

如斯を以考れば、古人の記憶強く、志概の厚かりし事を推して知べし。

一 八十七代後嵯峨院、寛元の頃、菅原為長、聖一、国師と儒仏の道を論ず。

聖一、釈氏の世系を挙て、孔子より道統の次第を問ふ。為長、答を失す。是、儒学の衰へて、仏氏の説世に盛んなる証也。是に付て林羅山先生の評有。事長ければ略す。

其後、九十四代花園院、正和の頃、北条義時の孫同実時、相州金沢に居住し、嗜学。文庫を建て、和漢の群書を集む。書帙悉く「金沢文庫」の字を印す。其内、儒書には黒印を用ひ、仏書には朱印を用ひたりと也。当世にも古書の残りて、金沢の印有本、稀には世にも流布する事也。

一 宋朝に於て、阿南の程氏出で、『礼記』の中より「大学」「中庸」の二篇を抽で、論孟に合せて「四書」と号。新安の朱氏、是を註す。今の新註、是也。「大学」の序を書終りし頃は、日本、八十二代後鳥羽院文治五年に当れり。

本朝にても、程氏と同志の人有。天武天皇の裔、舍人親王の後、清原頼業は儒門の家にて、父は音博士祐隆と云。頼業は八十代高倉院の侍讀たりしが、天子学問を好せ給ふ故に、日々に経筵に侍読せらるの時、『礼記』の中の「大学」「中庸」の二篇は、聖人の道の蘊奥を説る篇也」と抜出して書写し、叡覽に備へらる。頼業の心、程氏と符節を合せたるが如は、奇異なる事也。程氏の二篇を表章せると、和漢の時代も同じ頃かと見ゆ。頼業は文治五年夏四月、六十八歳にして卒せり。

扱、四書新註、本朝に伝来せし始は、九十五代後醍醐天皇の正中年中に、鎌倉の執権高時入道の頃、勢州垂水の産、河内守広信と云人、天皇学問を好せ給ふにより、京に入て省中に勤仕しけるが、朝政を怠り給ふ事を歎き、諫疏を奉りけれ共、用ひられず。常に万里小路藤房卿と中よく学問の道を論ぜしし序に、広信の曰く、「宋の大儒朱晦菴の『四書集註』、六年已前に始て本朝に渡来る。世儒未だ知る者なし。我幸に是を

得て、深く尊信す。思ひを此書に深くすべし」といへり。藤房卿、「許諾す」といへ共、藤房、元来仏氏を信ずる事深き故に、広信とあはず。終に通世有。

広信も乱世を避て勢州に退しを、後に尊氏、義貞の二将より重祿を以招くといへども、遂に应ぜず。妻子を携へ垂水に耕して、延文の頃、九十六歳にて卒すと也。是、本朝にて朱註を用ふるの始也。

又、吉野の先主の時に、玄恵法師始て新註を用ひ、程朱の義を唱へしと、貝原氏の考には見えたり。又其後、百一代後小松院応永十年に、南渡の帰船、『四書集註』と『詩経集伝』を載せ来るを、京都に達す。東福寺の不二岐陽和尚、始て此書を講ずると也。され共、仏者の積なれば、只其書の大意を語りのみ成べし。又、其頃、今川了俊、九州の探題にて下り被居し時、五経の新註を被得しと云事、軍記の内に見えたり。

其後、程朱の説を主とし、性理の学を世に唱ふる人多し。藤惺窩先生、林羅山先生は、訓点を加へて世に広め、天下の諸侯、大夫士の間に學術をいざなふは、実に二先生の大功によるもの也。

其後、京都にても錦里先生出づ。此門下に歴々の大儒多く出たり。室鳩巢、荒井白石、祇園氏、雨森氏、築田氏等の如き、是也。此外、南村梅軒、浅香彝林庵、藤井懶斎、山崎闇斎、中村惕斎、貝原益軒、宇都宮由迪、毛利貞斎等の如き、世に名高き大儒、皆新註によれる者也。

一 明の陽明王氏の学を主としたるは、江州の藤樹先生也。此人、博学多才、世に近江聖人と称したる也。履歴、『近世畸人伝』に詳也。此門人、熊沢了海、備前に於て学校を興し、専ら經濟を修して世に其名高し。又、京師に伊東仁齋先生父子有て、宋儒の学の古に非るを悟りて、古義を唱ふ。東都に徂徠先生有。仁齋の古義の未だ古ならざるを知て、宋儒と并

せて排し、専ら復古の学を唱ふ。明の李于鱗氏を慕ふて、古文辭を修する事を勤む。伊藤、荻生の両門下に大儒多く出たり。

如斯に各門戸を建て、學術の是非を相争ふが如くなれども、皆孔子を祖とするの義は一也。たとへば、仏氏の八宗九宗を分てるも、釈迦を祖とするに等しきといふべし。近年、復古の学の弊有るを知て、亦性理の学による人多し。

一 明曆年中、和刻の『前漢書』『後漢書』は菅家の訓点也。然れ共、十志には、訓点なかりしと也。古来、菅江の諸儒の秘し伝へたる事にて、両家の説法、其門人の外、猥にゆるさざる事也。就中、十志は深秘別伝として、書に点を下さずと見へたり。古の人の学ぶに難き事、是を以ても知るべし。

今は新に渡れる書にても、是をよむ事、かな書を讀が如くなるは、偏に太平の文化によると云べし。

又、本朝にて四書五経の訓点は、清原良枝に始る。此良枝は、清原頼業より六代の孫にて、後宇多院、後醍醐院、二代の御侍説也。当時、禁庭の御侍説、伏原殿は此子孫也。

惣じて五経、『文選』『論語』の類は、明経博士に付て素説せざれば、古来よりの説法の伝は知れざるのよし。『論語』の「乱臣十人」も「乱」の字は除てよまぬが法也。此事、茂卿の『論語徴』にも見えたり。

『論語』の疏を著はせし梁の皇侃をも、「ワウガン」と唱ふるが習ひ也。此事は、王応麟が『玉海』に「梁王侃」と有。又、明『呉風録』にも「王侃義十卷」と有。

日本の古へはよく如是事をも考へ究めて、よみくせを定置、相授けて、後世にも伝へし也。又、古へは「孝経」「曲礼」とよみしを、近世、憲

廟の御時より、「かうきやう」「きよくらい」とよむと也。

今は文字に付て、心任せに読なれば、十人は十色によむ事と成ぬ。何とよみても、四声もわからぬ和音なれば、読るやうによみて義の害もなけれ共、古より読来りしには、皆深意有事なれば、百に一も古来の読法を残し伝へ度事也。

一 吾国、古来より書を読に、本濁、新濁、半濁、連声と云事有。本濁は本来濁れる音を云。「実業」の類也。新濁とは音便に從て、下の字を濁てよむ也。「南山」「東方」或は「天下を三分にする」の類也。半濁とは「北方」「遠方」「葛伯」「翩翩」の類也。連声とは音便にて、「ナニヌネノ」「タチツテト」の音によぶを云。「天王」「本音」「漢音」「八音」「燕々」の類也。

又、古へ、書を読に朱を以、字の四方、中央に、星を点じて、和語の「てにをは」の印とせり。菅家、江家の点などいへる、是也。其後、近世は片カナを旁注にする事始りても、昔の名を存して、是を「点」といへり。又、かへりて読処にはかぎを付たるを、「かへり点」と唱ふるの類也。今の読法も、批点、圈点、段落、句読、朱引などの法有。

又、『毛詩』『文選』をよむには、古へは両点を用ひて、音と訓とをよめり。たとへば「参差とかた、がひなる行業のあさぎ」などの類也。此読法は、至て古きよりの事と見えなれ共、草木虫魚などの名に付、ちがへたる多かりし故か、今は此読法、廢したり。

朝鮮国の如き、体を先にし、用を後にいふの語、吾国と大抵相似たり。書を読む法も、彼国は此方両点よみの如く、句読の間に其国の語を挿み入て読むと也。

日本古来の読法は、漢字を和語に訳して、漢にて「学」と云は吾国に

ては「まなぶ」と云詞にて、「まなぶ」は「まねぶ」にて「真似の意也」としらするが故に、和語にてよまる限は、皆和語にて読ませたりと見ゆ。

今は和漢ともによく熟せるにより、自由に音にても訓にてもよむ事に成たり。近代、春台先生の説には、「今の書を読者、音によまる、限は、字音の通りによんで、和語のよみをなすべからず」といへり。是は、華人の書をやむに習ひて、彼国の読法を用ひて、和人を唐山流の心につつし、文義を了解せしめんと思へる成べし。

其後、兼山先生の説には、「和語の古雅なるもの、古来よりの読法に残れり。今、改て字音ばかりによみ下さば、我国の古語を失はん事を恐る」といへり。此説、和人の読書をするの正法と云べし。

一 本朝詩を遊ぶ事、五言の詩は大友皇子に始り、七言は大津皇子に始る。五言十句は紀の麻呂に始り、七言長篇は紀の古麻呂に始る。天子の詩は文武天皇を始とし、釈氏の詩は智蔵を始とす。女の詩は大伴姫を始とし、和韻は大津首始也。

古への詩は、皆晚唐已後の体に習へり。就中、中古、『白氏文集』を賞して、此風を学べると見えたり。天子の詩を好み給ふは、嵯峨、村上の二帝を最上とす。諸皇子には兼明、具平、輔仁に過るはなかりし也。

王政衰へて学校の教も怠り、源平已後の大乱に及んでは、三、四百年の間、文学の道、禅僧に伝はれり。足利將軍義満公已来は、詩文の事を禅徒に属し給ふにより、「文章は唯叢林に有」と称して、官家に問ふ者なし。

近世、妙寿院、羅山の二先生、石川丈山、深草元政の如き出て、詩文の作、古にはぢず。実に此道の再興といひつべし。され共、丈山の詩仙堂の建立などは、隠遁の物数奇成べし。近世、徠門の学者は盛唐を模倣

し、明の諸名家に效へるによつて、古来の詩風一新して人の耳目を驚かせり。

乍去、詩に韻をふみ平仄を合するは、いかなる故也と知る人稀成べし。唐人の歌をよみたらんに、此国の歌の三十一もじに定りたる訳は中々知るまじき也。

唐人の賤しき詞迄も自然と声律にかなへるは、其国の風気なれば、此国の人、何ほど其詞を学びても、唐人には及ばざるべし。此国の字音にて唐の詩を作るは、調子の合はぬ鳴り物を以、楽をするにひとしかるべし。此国にて詩作り文かける人の其才学は、唐人にもさまで劣らじと見ゆるを、唐人に見せたらば、是はといへる作は有がたかるべし。唐音も唐人に習ひてよく熟したるとも、二伝三伝を経ては、やはり日本の唐音と成て、彼国の人のがてん行まじ。是、風土の元来異なるが故也。朝鮮人の説に、「詩迄は作れど、歌曲の類は朝鮮にてはならず」といへり。是、唐人の声律に及ばぬ事をよく知れるが故也。

又、大潮和尚の語に、「春風三百九十橋」「示我十年感遇詩」「南朝四百八十寺」の類、「十」の字は仄音にても日本には嫌はざれ共、唐人はそこを吟味すると也。又、唐詩に「北風吹白雲」と有は、「汾上驚秋」類なれば、「西風」と作る筈也。され共、其時は「白」の字ばかり仄にて調声あしき故、時節にか、わらず、「北風」と作りたる也。かやうなる事、詩を知る人にあらずば解しがたしと也。

又、徂徠先生の門人井上善八、古郷の紀州より産物の蜜柑を善八母より徂徠の方へ贈遣しける時の詩に、「南州嘉樹后嘗栽、生子要若屈子才」と云作有。此詩、徂徠の没後に、南郭先生校合して梓に行はる、時、「屈子」を「屈原」と直して被出たり。南郭は華音学なき人なるが故

に、「屈子」「橘子」、音通ずる事を解せずして「原」の字に改ける故、此詩不面白成りしと、大潮の話也。

文章の体裁の如きも、詩と同じく彼国に通ぜざれば、助辞の法など拙く、錯置妄填の誤り免れがたきの由。日本の文章は、舜水朱氏の来朝の後、助辞の法、体裁に至迄、大に宜しく相成りたる也。

一 大凡、吾国の学間に二様有。和国の書を読と、支那の書を読むの差別有事は、彼国の書を学ぶ人は、和語を以、彼土の文字を訓じて其字義を解し、其書の意に通ずるを以、極功とすべし。本朝の書を読むには、和語を主とし、文字は異邦の仮り物といふを解して、異邦の文字の意と文義を以、和語を誤るべからず。

支那の文章に目馴て、吾国の人の記せる文書を見ては拙き書法など、云は、心得違ひ成べし。詩文章の作なども、前にも論ずる如く、元来此国の物に非れば、彼国に擬して何ほど宜しく作り得たり共、彼国人の見ては、未だ行届ざる処有べしと思はる。然共、初心稽古の為には、自身に詩作せざれば、詩の意を解しがたく、文章を書ざれば、彼国の書の体裁、助辞の法に暗く、布置整はざれば、結構体を失するの弊を免れざる事を恐る。此故に、詩文の作意も又、学業の一助と云べし。

然共、近世の学者、詩文を専にするの輩、吾国の地名等の雅ならざるを愁へて、唐土に擬して、彼国の地名に相似たるを悉く改めて、漢名を称してよぶ者多し。たとへば、今の京は平安城なるに、「長安」或は「雍州」とし、「洛陽」とよぶ。洛陽は成周の東都、洛水の北に有を以、称する地名なり。剩へ「洛中」「洛外」等の名有事、久しき事也。武州江戸を「武昌」「武陵」或は「江都」と称し、箱根の関を「函関」と称し、筑紫を「紫陽」とするの類、近年、『地名箋』等の書迄を出す。杜撰の甚しき

もの也。右の地名等を華人の聞ては、大に笑を催すべき事にて、日本の恥辱ならずや。

しかのみならず、姓名、別号等まで、皆華人を羨み、別に雅名を称する有。是は安陪仲丸などの如く、彼土に久しく居住せる留學生等ならば、平生華人を友として詩文章を贈答する輩は、さも有べし。日本の武士などには、似つかぬ戯れ成べし。当時、昇平日久しく、健将武夫も武を講ずるの暇、文学によつて義理を弁じ、政治の助けに用ふる文学成るべきに、武義を怠り、文芸にのみ流れて、武国の本意を失ひ、外国の風に陥らざるを、日本人の眉目とは称すべし。殊に、晩進未熟の学生などの、雅名、別号などを称するは、心得違ひにやと思はる。其内にも、儒学を以、登用せられ、食禄を賜り、文学を業とする先生などは、姓字、表徳号をよぶも、妨なかるべし。

とかく、学問に和漢の二筋有を不知して、混じて心得べからざるべし。一、日本にて書を板に刻む始は、八十三代土御門院、元久の頃よりの事也。され共、仏書、詩集の類、わづか二、三部と見えたり。長門の香積寺に『三重韻』の板有。又、角倉与市、『史記』と謡の本を開板せしと也。大方は活版也。直江山城守も『左伝』をうへじばんに摺せしと也。又、惺窩先生の門人中川宗伴、始て『四書』の文之点を板に彫らせしと也。

近世、慶長の末頃は、『庭訓往来』と『節用集』など少々有しが、寛永六年の頃より多くなり、正保の末より弥多く成て、書を求めるに安き世の中と成りぬ。此時節に逢ては、学二酉を究るも難からず、偏に太平の徳化の然らしむる処にして、武備を潤色し、文物の盛んなる事、開闢已来、当時の御治世にしくは有べからざるもの也。

和学知辺草 卷之下 大尾

寛政五年癸丑季春穀旦 西肥萩城 散人編選